

コロナ時代に神学は何を語るか

— 中世の教会 —

片 山 寛

1. はじめに

コロナの時代に、神学は何を語るか、という今日的なテーマをいただきました¹⁾、ことがらの巨大さを考えると、私は本当に何を語れるのだろうかと思われたいでここにおります。「コロナ時代に神学は何を語るか」……この言葉は、私にとって二つのことを意味しているように思うのです。ひとつは、「神学」という学問の全体は何を語るべきかという問題です。「神学」は、巨大な学問の全体ですから、実際的には私たちは、それぞれ自分の小さな専門分野を担当して語ります。皆さんはすでに二人の先生のお話しをお聞きになったと思いますが、日原先生は旧約聖書学、須藤先生は新約聖書学と初代教会の歴史を調べる立場から語られました。私は教理史を担当しております、特に自分が研究している、中世の疫病と教会の歴史から語ります。私の後では、才藤先生が実践神学の立場から、そして最後に、濱野先生が組織神学の立場から語られるのだらうと思えます。

そういう個別の神学の立場から語ることもできますし、私もこの後で、その立場から、ささやかな報告をさせていただくつもりなのですが、もう一方では、神学の全体はそれでは何を語るのだろうかという、巨大な問題があるのです。……私は、神学の全体を見渡せるような大学者ではありませんので、

1) この論文は2021年度後期に行われた西南学院大学神学部の公開講座「コロナ時代に神学は何を語るか」の中で、11月2日に「中世の教会篇」という副題をつけて片山が行った講演である。

その問題についてきちんとした答えを持ち合せているわけではないのですが、ただそういう問題がある、ということだけは、最初に申し上げておきたいのです。

神学の全体が語るべき問題、それは神さまです。13世紀の神学者トマス・アクィナスはそう言いました。神学の主題は神である、と。そしてその他のことから、神とかかわる限りにおいて (*quia habent ordinem ad Deum, ut ad principium et finem*²⁾)、附随的に問題となる。そうトマス・アクィナスは言いました。ですからここには、このコロナの時代に、私たちはどのように神さまについて語るべきか、そしてまた、神は私たち人間に、この疫病の中から何を告げておられるのか。それが私たち神学者に問われた最後の問題である。それこそが、この神学部の公開講座で、5人の神学研究者がそれぞれの立場から述べようと試みた問題なのです。それについては、私のささやかな講演の最後に、もう一度立ち戻って考えてみたいと思います。

2. 14世紀のペスト

さて次に私は、私自身の小さな神学分野である「教理史」から、この問題「コロナの時代に神学は何を語るか」について考えてみたいと思います。私の専門分野は中世ヨーロッパのキリスト教であります。中世にも何度か、疫病がこの世界を襲った時代がありました。有名なのは、6世紀にあったユスティニアヌスの疫病と14世紀から17世紀までのペスト、いわゆる黒死病であります。ここでは特に、中世のキリスト教世界を終わらせるにいたった、黒死病について述べさせていただこうと思います。

先週の、須藤先生の御講演を私も伺ったのでありますが、古代においては、キリスト教は251年のいわゆる「キプロスの疫病」に対して、ある意味で理想的にふるまったかもしれない、と思われるのであります。ある程度危険を冒しつつも、クリスチャンは病人を看病しつづけた。助け合いを忘れなかつ

2) 「神を根源としてまた目的として、神への秩序を有するからして」 Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, I, 1, 7.

た。その結果、疫病の中ではありましたが、クリスチャンの死亡率は当時の一般の人々よりも低かったのではないか。そういう、ロドニー・スタークの研究³⁾が紹介されていました。

そこで、私は中世のキリスト教を考えるのですけれども、ここではキリスト教は、古代とは比較にならないほど大きな社会的役割を保持していました。14世紀のキリスト教は、西欧世界全体を文化的・政治的に支配していたと言っているのです。しかし、14世紀の半ば、1347年から始まったペスト *pestis* (疫病)、これに関しては、当時のカトリック教会は、対処を誤りました。何も有効な手が打てませんでしたし、人々を適切に指導することもできませんでした。その結果、多くの人々が悩み苦しめ、心のどこかで教会に対する信頼を失いました。そしてその結果として、大きな社会的な変化が起り、教会もその中で変質していきました。ペストの60年ほど後から、ヨーロッパの各地で、カトリック教会に対する疑問の声が上がるようになり（ウィクリフ、ヤン・フス 1415⁴⁾）、さらにそれがやがては1517年のルターの宗教改革に繋がっていったのです。

ですから彼らに対処法を誤ったのは明らかなのですが、それでは彼らはどうすればよかったのか、それは現代の私たちから見ても、よくわからないのです。当時は西欧のカトリック教会の全盛期でした。ローマ教皇は絶大な力を持っていて⁵⁾、人々は教会に救いを求めていました。ちょうど今、私たちが医療技術に救いを求めるようなものです。しかし教会はそれを救う力を持ちませんでした。そして大勢の人びとがペストで死にました。短期間に、ヨーロッパの全人口の約3分の1、2000万人から3000万人の人びとが死んだと見積もられています。

3) ロドニー・スターク「疫病・ネットワーク・改宗」『キリスト教とローマ帝国——小さなメシア運動が帝国に広がった理由』（穂田信子訳）新教出版社 2014年、95-124頁。

4) ウィクリフ（071頁15行目）John Wycliffe 1320-84とフス Jan Hus 1371-1415はともに、1415年のコンスタンツ公会議で異端宣告された。

5) とはいえ当時、クレメンス5世の1305年からウルバヌス5世の1367年まで、教皇庁はフランスのアヴィニョンに置かれていた。それは、ローマ教皇座が国家の支配とのバランスの中で動揺していた時代だったとも言える。

ですから私たちは、古代のキリスト教とは違って、今回は彼らの失敗から学ぶこととなります。しかし彼らは何を失敗したのか。それを考えてみると、私たちは考えこまざるを得ません。彼らはどうしたらよかったのだろうか。この時代には、まだ「病原体」という考え方でさえありませんでした。疫病が発生する。そして人びとが原因もわからないままに、従って対処法もわからないままに、ばたばたと死んでゆく。しかもペストの場合には大変苦しい、無残な仕方です。

最初、わきの下や鼠蹊部のぐりぐり（リンパ腺）が腫れて、それが血のかたまりのように黒くなって、さらにそれが全身に広がってゆく。ひどい場合にはいたるところにこの斑点ができて、身体じゅう真っ黒になって死んでゆく。そこで人々はこの病気を黒死病 the black death と呼びました。発病してから死ぬまではわずか3、4日で、発病した人々の約7割が死にました。発病したらまず助からない病気だったのです。これを腺ペストと言います。

黒死病にはもう一つのタイプがあって、これは患者と接する人が患者の呼吸を通して直接感染するもので、胸に激しい痛みがあり、また激しい頭痛があって、患者の多くは最後には錯乱状態になって、大声でわけのわからないことを叫びながら、家族とまともにお別れを言うこともできずに、苦しんで、苦しんで死にました。これは劇症でありまして、発病してから死ぬまではわずか2日から3日でした。これを肺ペストと言います。当然のことですが、恐怖が社会を支配します。人々は救いを求めて教会に行きます。しかし教会は、彼らを助けてやることができませんでした。

中世ヨーロッパの人々を恐れさせたのは、死ぬことそのものよりも、このような無残な死に方であったのです。

そもそも中世ヨーロッパの人々にとって、死ぬことそのものは、もちろん怖いですが、しかし一般に彼らは、私たち現代人ほど死を怖がってはいませんでした。時が来たら誰でも死ぬわけですし、場合によっては死ぬ方が救いでもあった。フィリップ・アリエスというお墓の学者が言っておりますけれども、中世の人々には、言わば「死に方の作法」というべきものがあって、それを守って死んでゆく。それをきちんと守れる限りにおいて、天

国に行くのは、教会によって言わば約束されておりまして、生前の罪の軽重によって、早い遅いの違いはありますけれども、最後には間違いなく天国に行ける、大丈夫だ、と信じられておりました⁶⁾。この世でうまくいかなかった人々、貧乏なままで死んだ人々は、天国ではむしろ素晴らしい暮らしが待っている。逆にこの世で豪華な暮らしをして、貧乏人を省みなかったお金持ちは、あの世では火の中でもだえ苦しむのだ（ルカ16章19-31節）という聖書の教えを、人々は信じていたのです。

当時は医療技術が発達しておりませんから、病気になったら先ず死を覚悟しなければなりません。いよいよ最期が近づいたと知ると、中世の人々は、先ず家族や友人など、親しい人々を枕辺に呼び寄せる。そして一人一人にお別れを言うのです。それから教会の司祭つまり神父さまにきていただいて、「終油」*unctio extrema* という儀式をする。これは、「病者塗油」とも言って、香油（においあぶら）を額に塗ってもらう儀式なのです。それから自分の生前の罪を神父さまに告白して、最期の聖体拝領をする、つまりホステアと呼ばれるパンを口に入れてもらう。聖餐式をするわけです。こうした仕事がすべて済みましたら、後は、身体を東の方角に向けてもらって、死が訪れるのを待つのです。東の方を向くのは、イエス・キリストがやがて終りの日に再臨なさるのですが、その場所は、エルサレムだと信じられていたからです。ヨーロッパから見てエルサレムは東の方角にありましたから、彼らはキリストの再臨をお迎えする姿勢で死ぬことを願ったのです⁷⁾。

これが「死に方の作法」というものでありまして、それを守れば心安らかに死んでゆけるのですが、黒死病の場合には、それが守れないのです。むしろ、もしかしたらこの人は地獄に真っ逆さまに落ちて行くのではないか、と思えるような死に方しかできない。そのことが、中世の人々を本当に苦しめたのでありました。

6) フィリップ・アリエス『死と歴史——西欧中世から現代へ』みすず書房 2006年、15頁以下。

7) TRE, S. 744f. 拙論「古代・中世の教理史における死と葬儀」『西南学院大学神学論集』第66巻第1号、2009年、35頁以下参照。

ボッカッチョという文学者がイタリアのフィレンツェで起ったペストのことを、『デカメロン』という物語集の中で述べていますが、病人が家族に見放されて、一人ぼっちで死んでゆくことが非常に多かったと言います。

「昼夜を分かたずに、街頭で息絶える者の数は知れず……自分の家で息を引き取る者の数はさらに多かったが、遺体が腐敗し悪臭が漏れ出て来て、初めて近所の人に気づいてもらえるようなありさまだった。こういうふう

に所かまわず死んだ者たちの臭いがあたりには満ちていた」。

「隣人同士がお互いを避けるだけではなかった。……この疫病は、男女を問わず、人々の心に大きな恐怖を植え付けたので、兄が弟を、叔父が甥を、妹が兄を、さらには妻が夫を捨てることもざらだった。だが、もっと忌わしく、ほとんど信じ難いのは、父母が実の子に対して、まるで赤の他人であるかのように、看病や世話を放棄したことだ」⁸⁾。

ペストの中で、社会がほとんど崩壊に瀕してしまったということが報告されているのです。ただ少数の、自分の持ち場を離れず日常の業務をしつづけた人々、先週の須藤先生が紹介なさったアルベール・カミュの『ペスト』という小説の中のグランという誠実な小役人のような人々、それらの人々によってかろうじて社会が維持されたのだと思います。

3. 教会の対処

ペストの勃発は、ローマ教皇クレメンス6世（在位1342-1352）の時代なのですが、彼はペストの流行に対して、なすすべなく放置するしかありませんでした。彼は天文学者に命じて、ペストの天体学上の原因を研究させました。地上で起る疫病には、天文学的な原因があると信じられていたからです。また外科医に命じてペストの犠牲者を解剖させました。しかし顕微鏡もない

8) ボッカッチョ『デカメロン』第一日より。ジョン・ケリー『黒死病』146-7頁参照。

時代でありましたから、原因はわからずじまいでした。

当時ローマ教皇庁はフランス南部のアヴィニョンにあったのですが、1348年にアヴィニョンの町がペストに襲われたときに、クレメンス6世はペストを避けてアヴィニョンから逃げだしています。市民や教皇庁の職員のほとんどは置き去りでした。5月から9月までの4カ月ほどですが、ローマ教皇自身が、恐怖に駆られて、責任を放りだして田舎に逃げてしまったのです。当時から、人口が密集する都会よりも、田舎の方が比較的安全だろうということは経験的にわかっていました。クレメンス6世は、インテリで自信たっぷり、この時代の人としては良心的にふるまった人だとされているのですが、個人的には臆病な人だったと思います。

9月になってクレメンス6世はアヴィニョンの教皇庁に戻るのですが、教会の聖職者である司祭たちの死亡率の高いのに驚きます。というのは、司祭たちはペスト患者が亡くなる前に、最期の告白を聞いて、罪の赦しを宣言して、聖体拝領（聖餐式）をする義務があったのですが、よく聞き取れない患者の告白を一生懸命聞いているうちに空気感染して、肺ペストに感染してしまったからです。まず肺をやられて呼吸困難になり、激しく血を吐きながら、数日で死んでしまう。時には自分が看取った患者よりも先に死亡する司祭もあったと伝えられています。当時の一般人のペストによる死亡率はおよそ3分の1でしたが（発病してからの致死率は約7割）、教会の司祭に限っては半分から6割の死亡率だったと言われています。

とりわけ修道院の修道士たちの犠牲者は多く出ました。全滅したという修道院もめずらしくありません。修道院の中には、とりわけフランチェスコ会やドミニコ会といった托鉢修道会の場合には、修道院そのものが都市近郊にありまして、都市住民の病人を介抱したり、貧民救済事業に使命感を持っている修道会が多くありました。修道院というものは、平の修道士はよく大部屋で共同生活をしていましたから、一人が感染するとあっという間に全員に広がったのです。ヴェネツィアのスクオーラ・デラ・カリタ修道院では、300人ほどのメンバーの中で生き残ったのはたった一人だったと伝えられています。フィレンツェのドミニコ会修道院サンタ・マリア・ノヴェッラでは

130人の修道士のうち80名が死亡しています。アヴィニョンのカルメル会修道院では66人の全員が死亡しています。

この危機の時代に、ローマ教皇が一時期にせよ職務を離れていたのは、致命的な失敗でした。職務に復帰してから、クレメンス6世は教会の聖職者たちがばたばた死んでいる現状に驚いて、病人が最期の告白や終油の儀式を受けずに死亡しても、そのことによる霊的な罰を受けることはない、という教皇令を發布します。これを「総赦免」といいます。要するに、司祭が来てくれなくて教会の儀式に与らなくても、大丈夫、天国には行けますよ、という宣言でありまして、カトリック教会が自分の仕事が無意味であることを宣言したようなものです。ある意味では勇気のいる決断だったと思いますが、それだけ追いつめられていたということでもあります。

中世は、聖職者の養成に非常に長い期間が必要でした。ラテン語という特別な言語を学んだ上で、大学で三学四科（文法、修辞、弁論、算術、幾何、天文、音楽）を学び、更に哲学を収めてから、神学の学びをする。正式には10年間以上も学ぶ必要があったのです。それだけの時間をかけて養成した人びとが一挙に半分以下に減ってしまったのですから、教会がまともに機能しなくなったことは容易に想像がつきます。虎の子の司祭がこれ以上死んでしまっただけでは困りますから、終油の儀式は省略してもかまわないことにした。

その他にクレメンス6世がした仕事としては、各地でユダヤ人の強制改宗や財産没収、虐殺が続いているので、これを禁止する教皇令を出したということがあります。民衆の間では、ペストは神さまからの罰なのだという迷信がはびこっていました。教会も、ペストの原因がわからないのですから、それを否定できません。神さまの罰だ、となった時に真っ先に思い浮かんだのは、同じ町に住んでいるのに教会の礼拝に出席しないユダヤ人たちのことでした。こうして、各地でユダヤ人に対する迫害、つまりポグロムが頻発しました。私たちは日本でも、関東大震災のおりに在日韓国・朝鮮人に対する虐殺があったことを思い出します。

クレメンス6世は、「ユダヤ人がペストの原因だとする説には信憑性がない。ユダヤ人自身がペストの被害者になっているからである」と教皇教書で述べているのですが、昂奮している民衆の耳には届きませんでした。

4. 中世の教会の「過ち」

14世紀のペストの原因がペスト菌という細菌によって引き起こされたものであるとはほぼ明らかになるのは、19世紀の終り、1894年に香港での流行の際にこの細菌が発見されてからであります。それまでは原因が全くわかりませんでした。ですから、中世の教会がそれに対して適切な対処ができなかったのは仕方ありません。

またいくつかの不運な出来事もありました。この14世紀半ばの時点での世界最高の神学者は、オッカムのウィリアム1285-1347年という、フランチェスコ会の修道士でありました。だいぶ以前（1986年）のことですが、『薔薇の名前』という映画が評判になったことがありまして、中世の修道院で起きた殺人事件を探偵役の修道士が解いてゆく物語なのですが、あの映画の中でショーン・コネリーが演じていた探偵役のバスカヴィルのウィリアムという修道士のモデルになったのが、このオッカムのウィリアムであります。彼はフランチェスコ会の厳格派の立場⁹⁾をとって、貧しい清貧の生活を守ることを信条にしていたのですが、他方では非常に近代的な哲学的立場・唯名論の創始者でもありました。ルターの宗教改革は、哲学的にはオッカム哲学の結果であったと言われます。また近代科学もすべてオッカムの思想から出て来たものでした。つまりオッカムは、敬虔な信仰生活と、近代的・合理的な知性の両方を備えた人で、この時代の神学者として理想的な人だったのですが、このオッカムが、1347年に、ペストが始まった初期の頃にペストにすぐ感染して亡くなってしまうのです。

フランチェスコ会は病人の介護に熱心に取り組んでおりましたために、多くの犠牲者を出しました。また清貧の生活をして、断食に近い貧しい生活をしていたことも、オッカムのウィリアムが病気で亡くなってしまう原因のひとつだったと思われれます。しかしそれにしても残念な惜まれる死でありました。

9) 同じ厳格派ではあっても、終末論的な傾向の強かったフランチェスコ会聖霊派とは区別すべきである。

それでは中世の教会の過ちとは何だったのでしょうか。

それは個別的・偶然的な失敗ではなくて、結局、中世という時代そのもの問題だったと言わねばならない、と私は思います。中世はキリスト教が世俗社会をしっかりと支配している時代でした。人々は一日を教会の鐘楼にある鐘の音に区切られて生き、一週間を日曜日の礼拝に区切られて生き、一年をクリスマスや復活祭や、聖霊降臨祭や——たとえば今日11月2日は、カトリック教会では「万霊節」Allerseelenと言って、亡くなったすべての魂のために祈る日なのですが——一年間をそれらの様々な教会の祭に区切られて生き、そして一生涯を教会の洗礼から堅信礼、聖餐式、結婚式、終油（告解と按手礼を含めて七つのサクラメント）までの、教会の儀式に区切られて生きました。それらのすべての支配を支えているのが、結局この、天国は約束されているという理念だったのです。地上の暮らしでどんなに不幸なことがあっても、天国は約束されている。教会がそれを約束している。カトリック教会の、ローマ教皇から地域の司祭までのヒエラルヒーの全体が、「教会は神さまの代理人だ」という考えによって支えられていました。

ペストはその一番中心のウィークポイントを突いたのです。教会は本当に神さまの代理人なのか。神さまは教会が思い通りに動かせるような方ではないのではないか。現に、教会がどんなに祈っても、ペストは遠慮なく襲ってくるではないか。それどころか、教会の神父さまたちの方がばたばた死んでいるような有様ではないか。それは、高位聖職者や、ものごとを冷静に見ている神学者たちはすでに承知していたことでしたが、大勢の庶民がそう考えはじめた。

ですから、このペストという病気がやがては中世社会を崩壊させて、ルターの宗教改革を起こさせる遠い原因だったという歴史学者の見方は正しいと私は思います。ルターが述べたことは、つきつめて言うと、「神は神だ、そして人は人だ」ということでした。教会がどんなに豪華な儀式をやっても、免罪符を発行しても、巨大な教会を建設しても、それによって神さまを動かすことはできない。明日は誰にもわからない。私たちにできるのはただ、今日一日ぶんの、神さまの恵みにささやかながら感謝の祈りを捧げることだけだ。

中世の教会の過ち — これを「過ち」と言っているのかどうか、よくわかりませんが — それは、いつの間にか教会が、人々を政治的に支配する道具になってしまっていたことでした。16世紀に宗教改革、そして近代がやってきて、教会が、カトリック教会を含めて、そのような政治の道具の役割の重荷から解放されたこと、そしてこれからは、ただ教会は人々のしあわせのために祈り、努力すればよいのだ、ということになったのは、本当によかったと思います。

5. おわりに

以上、中世のペストという病気がもたらしたものを、特に当時のカトリック教会との関係で話させていただきました。私たちは中世の教会の失敗から学ぶべきではありますが、それは中世を否定しようというのではなく、自分自身の将来のために、そこから貴重な教訓を学ぶためであります。

最後に、最初に言い残した宿題、この現在のコロナの時代に、神学の全体は何を語るのか、ということについて、わずかながら、私の考えを述べさせていただきます。

中世の人々は、ペストの原因が何であるかわかりませんでした。ひとつの町がペストの脅威にさらされるのは数カ月から1年ぐらいで、その間人々はなすすべもなく、恐怖にふるえおののきました。それからペストは、来たときと同じように原因がわからないままに去ってゆきます。しかし本当に消滅したのではなくて、どこかにこの病気はひそんでいて、第二波、第三波と襲ってきます。

圧倒的多数の人びとが思っていたのは、これは何か神さまからの罰なのだ、ということでした。ローマ教皇クレメンス6世も、説教の中で、人間の罪深さが神さまの怒りを蒙ったのだ、と述べています。

しかし今日、私たちはコロナの原因がコロナ・ウイルス (COVID-19) であることを知っています。それを発見するにいたった偉大な医療技術の発展には驚く他はありません。私たちはまた、コロナに対するワクチンが技術者

によって開発されて、それが一定程度の効果があることも驚異の目で見守りました。また同時に、医療技術が万能ではないこと、人類はまだ何年もこのウイルスと戦い続けねばならないだろうということも、この2年間で理解してきたと思います。世界のどこかにこのウイルスが生き続けている限り——現在、世界では、一日に五千人から一万人ぐらいの人々が、コロナで亡くなっています¹⁰⁾——死者の数が多いのは、アメリカとロシアという超大国で、両方とも一日の死者が千人を越えています。

では私たちは、このコロナの時代に、神さまをどこで見出せばいいのでしょうか。また神さまはこのコロナの時代に、私たちに何を告げておられるのでしょうか。

「わかりません」というのが、一番正直な私の答えであります。しかし中世のペストの経過を学んだことにつながりで申し上げるとすれば、私には、今も昔も、神さまは同じことを告げておられるのではないか、と思えます。つまり、私たちの救いは神さまにあるということを感じて、正しい社会を作ることに努めなさい、ということです。私たちは医療技術の偉大な成果に信頼しますが、それが私たちに本当に救えるわけではないということも、この2年間で学びました。救いは神さまにある。そして神さまに救いがあるということは、私たちがこの地上で、正義が行われるようにするということでもあります。老人ややもめや孤児^{みどりご}が生きてゆける社会を作る。貧しい人々が幸いだ、泣く人々が幸いだ、飢え乾く人々が幸いだ (マタイ5章)、と言える社会を作る。そのことによって始めて、私たちはコロナに打ち勝つのだ、ということでもあります。

10) 講演 (2021年11月2日) の時点での数字。